國學院大學学術情報リポジトリ

《報告一》東日本大震災被災地における復興支援と震災伝承の取組み

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 平本, 謙一郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001094

【第一部　個別報告】

《報告一》東日本大震災被災地における復興支援と震災伝承の取組み

平　本　謙　一　郎

ただ今ご紹介頂きました、公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構東日本大震災・原子力災害伝承館の平本と申します。どうぞ宜しくお願い致します。

今回、私がお話をさせて頂くのは、「東日本大震災被災地における復興支援と震災伝承の取組み」についてです。まず簡単に、私が今専門としている震災伝承の取り組みとその現状についてお話をさせて頂き、そこで震災伝承の取り組み、あるいは施設が復興支援とどのように具体的に結びついているのか、具体例を用いてお話をさせて頂ければと考えております。お時間も限られていますので、早速、お話の方を進めさせて頂きたいと思います。

【写真 1】　東日本大震災後の宮城県女川町

インド隊ＮＤＲＦ@宮城県女川町

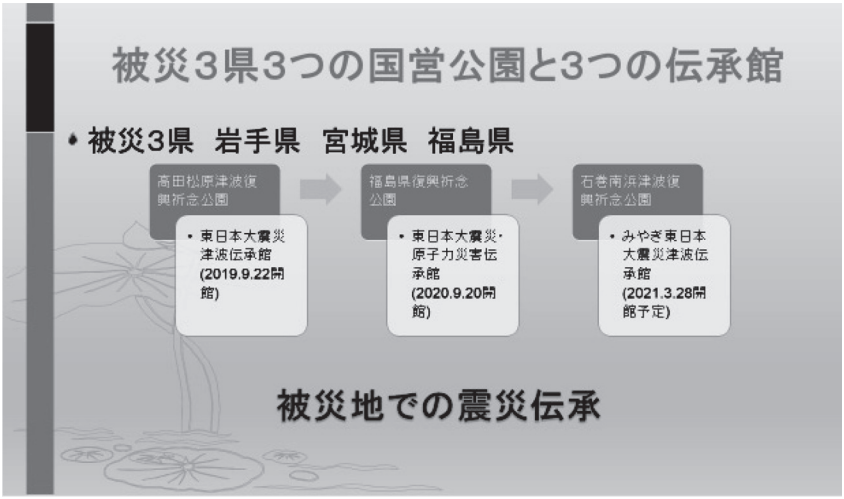
私は神奈川県出身で横浜生まれ横浜育ちなのですが、平成二十三年（二〇一一）三月十一日、あの日あの時は港区で仕事をしておりまして、被災をしてその日は帰宅難民で横浜の自宅には帰宅できませんでした。翌日、電車が動き出して漸く帰宅できましたが、三月十一日は地震・津波、そして原発事故も起こっていました。そういった実際のニュース映像を見て、これは本当に大変なことが起こったと思いました。当時在学しておりました國學院大學大学院文学研究科文学専攻高度国語・日本語教育コースで勉強していたときに日本語教育学会という学会があり、神田にある東京通訳アカデミーがボランテイア通訳のステーションを立ち上げたという情報を得ました。数少ない情報の中から、これは何か自分でお手伝いできることがあるのではないかと直感的に思いました。それはなぜかというと、東京消防庁上級救命技能認定証や、アメリカの赤十字社の「米国赤十字ＣＰＲ／ＡＥＤ資格認定証」を持っていたからです。ですので、こういった資格を活かせないかと思い、東京通訳アカデミーに登録をしました。そうしましたら後日、インド大使館の救援部隊の通訳の「災害時通訳ボランティア」の募集が再度かかりまして、そのセレクションで選んで頂いたということです。約三〇〇名の応募者があったのですが、そのうち男性四名の募集の中の一名に選んで頂きまして、宮城県女川町に向かいました。

【写真 2】 インド隊による行方不明者の捜索（女川町）

こちら宮城県女川町の状況ですが、**【写真1】**でご覧頂いておりますように本当に、爆弾でも落ちたのではないかと思えるくらい、町自体が無くなっておりまして、ここでは町民の方が呆然と街を見るしかなかったという状況です。そしてインド隊は四十六名がインドから派遣されて来まして、行方不明者の捜索を行ないました**【写真2】**。時期的には三月二十八日から四月の上旬までということで、生存者の救出には遅れてしまいましたが、まだ出来ることが沢山ありました。行方不明者が非常に多くいた時期です。一方、インド隊のほうも軽装備ではあったのですが、放射能の空間線量を計る測定器、ガイガーカウンターの放射線量の値を気にされていました。放射性物質の飛散についてかなり敏感になっていたことを今でも覚えています。そして、この活動がきっかけで私は一昨年、岩手県の東日本大震災津波伝承館の解説員として働くことになったのですが、その被災三県といわれる岩手県、宮城県、福島県でどのような形の伝承施設ができているのか、国営、県営以外にもいろいろな伝承館ができていますので、概略をお伝えしたいと思います。

被災三県三つの国営公園と三つの伝承館

被災三県の三つの国営公園と三つの伝承館についてお話します**【図1】**。まず、岩手県では、「高田松原津波復興祈念公園」がまだ整備中です。一部公開されていまして、その中に「東日本大震災津波伝承館」が令和元年九月二十二



【図 1】　被災三県三つの国営公園と三つの伝承館

日に開館致しました。そして時系列的に見ていきますと、福島県では「福島県復興祈念公園」がこちらも整備中となっております。こちらの公園に隣接する形で昨年、令和二年九月二十日に東日本大震災・原子力災害伝承館がオープン致しました。私は現在こちらに勤務しております。今年、宮城県石巻にも石巻南浜津波復興祈念公園が整備されています。そこには、みやぎ東日本大震災津波伝承館も併設されます。令和三年三月二十八日にオープン予定です。

こういった形で国営の公園、県あるいはそれに準じる団体が管理した伝承館がそれぞれオープンしている、もしくはオープン予定となっています。そして被災地での震災伝承にこれから当たっていくわけですが、まだ宮城県のみやぎ東日本大震災津波伝承館がオープンしておりません（令和三年六月六日オープン）。ですので、ここで、私の経験から東日本大震災津波伝承館と東日本大震災・原子力災害伝承館の概略について、それぞれリーフレットがありますので、それを基に説明をさせて頂きます。

【写真 3】「東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアル」リーフレット

東日本大震災津波伝承館

東日本大震災津波伝承館のリーフレットの右側を見て頂きますと、「ミッション・ステートメント」とありますが、これが東日本大震災津波伝承館の核となるものです【写真3】。それはどういうことかというと、「命を守り、海と大地と共に生きる～二度と東日本大震災津波の悲しみを繰り返さないために～」、これがミッション・ステートメント、核のテーマとなります。東日本大震災津波伝承館は、これを伝えるために全体で四つのゾーンに分かれています【写真4】。自然災害である津波の恐ろしさ、そのメカニズムなどを伝えています。

ゾーン1では、「歴史をひもとく」がテーマになっています。特に三陸沿岸部は、何度も津波の被害にあっていますので、地震と津波の歴史を紐解きながら繰り返す津波の怖さや恐ろしさを伝えています。日本の自然災害に対する、特に津波対策、地震対策につ

【写真４】「東日本大震災津波伝承館　いわて TSUNAMI メモリアル」フロアガイド

いてまとめているゾーンになります。ゾーン２では、「事実を知る」ということで、こちらは実際の被災物の展示となります。陸前高田にありますので、その気仙大橋の橋げたや岩手県北にある田野畑村の被災した消防自動車などを展示して実際の津波の破壊力などを見て頂きます。そしてゾーン３では、「教訓を学ぶ」がテーマとなっています。今回の東日本大震災から得た教訓、実際の対応や、警察、消防、自衛隊、医療関係者がどのような対応をとったのかというところで、教訓を学んでいきます。そしてゾーン１から３の建物から少し離れた別棟にありますゾーン４では、「復興を共に進める」をテーマに、現在の復興の状況をパネル展示、企画展示として展示をしております。津波の歴史をお伝えする目的のガイダンスシアターでは、実際の津波の映像も含まれるので来館者には必ず注意を喚起したうえで見て頂きます。もう一つ、「３・11」シアターがあり、東日本大震災で発生した津波の映像が市町村ごとに

【写真５】「福島県東日本大震災・原子力災害伝承館」リーフレット

見られるようになっています。こちらもガイダンスシアター同様、フラッシュバックを避けるために上映前には必ず注意喚起を促します。以上が東日本大震災津波伝承館の概略になります。

東日本大震災・原子力災害伝承館

一方、現在私がおります福島県の震災伝承施設、東日本大震災・原子力災害伝承館にもリーフレット【写真５】がございます。リーフレットの表書きに、「あの日からの経験」、「みらいへの教訓」とあり、【写真５】の右上の箇所には、「未曽有の複合災害を経験し、復興への途を歩んできた福島の記録と記憶を防災・減災の教訓として未来へつないでゆく」とテーマが記されています。一言に東日本大震災の伝承館といってもその場所、地域性によって全く伝えるものが違ってきます。

では、詳しく中身のほうを説明させて頂きます。福島県東日本大震災・原子力災害を中心とした展示や語り部講話を通じて、震災の記録と記憶を教訓として防災、減災に役立てることをテーマとした伝承館です【写真６】。特に福島だけが経験した原子力災害をしっかりと伝えるために、

【写真 6】「福島県東日本大震災・原子力災害伝承館」フロアガイド

基本理念としましては、「一、未来への継承・世界との共有　二、防災・減災　三、復興の加速化への寄与」の三つとなっています。それを具体的にどのように伝えていくのかというと、原子力災害伝承館の場合は、まずはプロローグ、導入シアターで五分ほどの振り返りの映像を見て頂いています。こちらは実際に来館して皆さんに見て頂きたいのですが、天井までの高さが七メートル。幅十五メートルの大型ワイドスクリーンが壁に六面、床に一面、合計七面。そこに昭和四十二年からの約五十年間の振り返りの映像を映し出しています。ここで、今回の東日本大震災の原子力災害をまずは自分のこととして捉えて頂くため、プロローグシアターをご覧頂いております。

　展示室は二階建ての構造になっており、五つのゾーンに分かれています。それぞれ簡単に説明しますと、ゾーン１は、「災害の始まり」です。災害前の美しい豊かな福島を映像と写真で振り返って頂きます。次に三月十一日午後二時四十六分にあの東日本大震災が発生して、大津波も発生した映像も時系列にご覧頂いています。そしてその地震から約五十分後にその大津波が福島第一原子力発電所を襲う様子もご覧頂いております。

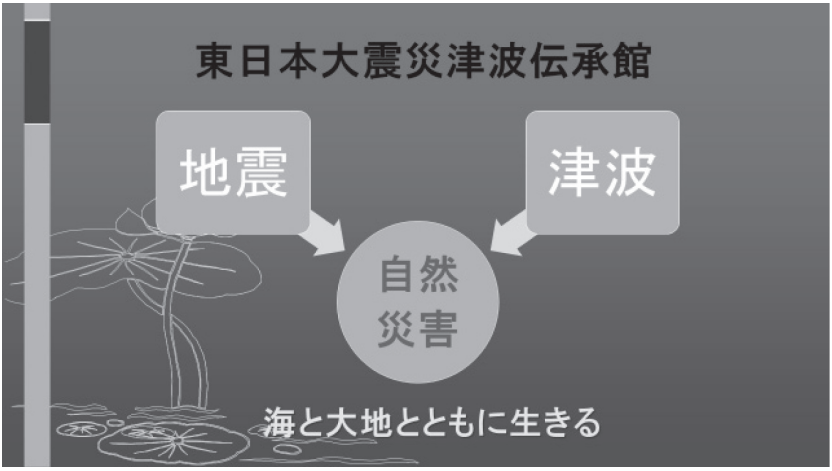
次のゾーン2に参りますと、「原子力発電所の事故直後の対応」がテーマになります。こちらのほうも展示物とNHKの実際のビックデータなどを基にした映像をご覧頂いております。その時、県民がどのように避難をしたのか、あるいは事故直後、原子力発電所はどういった動きをしたのか。また、復興の物資が滞り、避難指示が拡大するにあたって、物資不足になってしまいました。そのようなことをそれぞれに映像でご覧頂くことができます。ゾーン1と2は黒を基調としたゾーンになります。

一方、白を基調としたゾーン3に行きますと、「県民の想い」をテーマに、県民のそれぞれの事故後、震災直後の思いなどを展示物と証言の映像によって展示をしています。

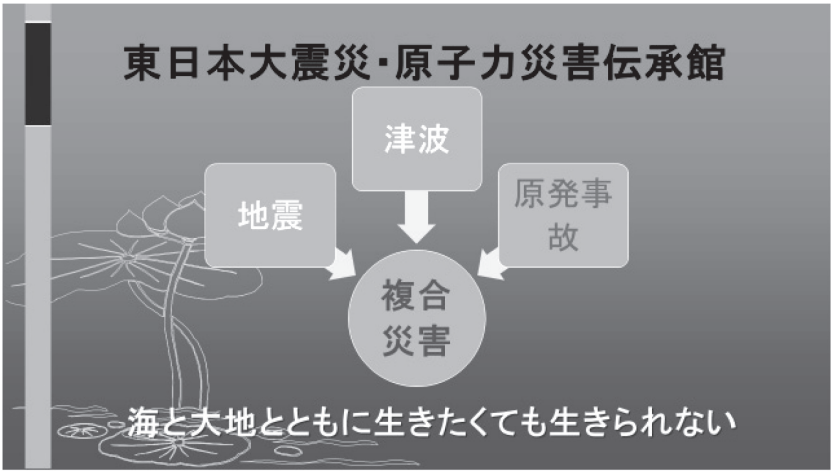
ゾーン4は、「長期化する原子力災害の影響」というコーナーになります。ここでは、長期化する原子力災害を四つのテーマからまとめさせて頂いております。一つ目は、除染、二つ目は風評。そして三つ目は健康に関する取り組み、四つ目は、「長期化する被害への対応」ということで、それぞれのテーマの現状や、そういった課題を展示物、データをタッチパネルで紹介しています。

そして最後にゾーン5は、「復興への挑戦」をテーマにしています。こちらは現在、緊急の課題となっております廃炉作業、復興の状況をみるタイムラプスのオーバー連続動画、写真などの静止画像、そして福島イノベーション・コースト構想推進機構の取り組みなど、復興の加速化への寄与をご覧頂けます。また、ゲーム感覚で「町づくりを学べる」ということをテーマとして、未来の町をタッチパネル、町づくりのゲーム「みらいのまち」などにも参加して頂きながら、今後の町づくりなどに、特にお子様などに興味をもって頂けるような仕掛けがあります。そして屋上には海のテラスがあり、そこから目の前にある海、そして福島県復興祈念公園を見渡せるようになっています。

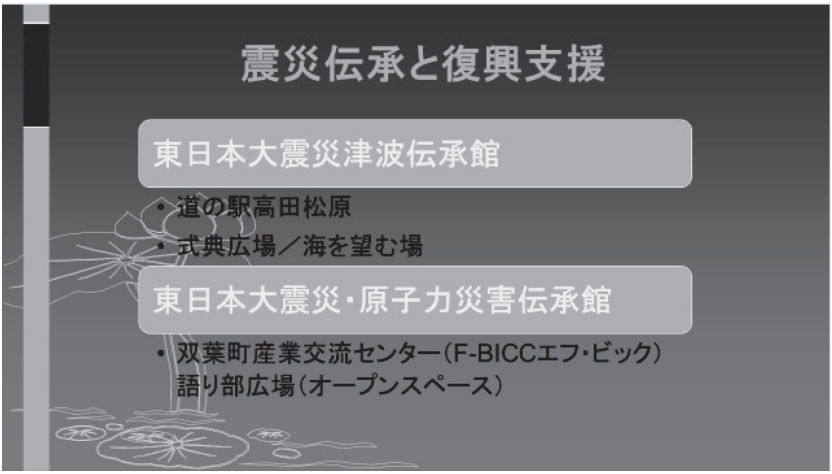
要点をまとめていきたいと思います。岩手県の東日本大震災津波伝承館では、地震・津波という主に自然災害に



【図 2】　東日本大震災津波伝承館



【図 3】　東日本大震災・原子力災害伝承館



【図 4】　震災伝承と復興支援

ついて扱っています。そして「命を守り海と大地と共に生きる」、というところをテーマとして、震災伝承活動をしている施設になります【図2】。

一方、福島県の東日本大震災・原子力災害伝承館は、地震・津波そして原発事故が入り、複合災害として、原子力災害を中心に震災の伝承を行っている施設になります。岩手県の東日本大震災津波伝承館では、「海と大地とともに生きる」というのが一つの大きなテーマでした。一方、福島県の東日本大震災・原子力災害伝承館で私が思ったことは、「海と大地とともに生きたくても生きられない」方が非常に多かったということです【図3】。いまも複合災害・原子力災害は続いています。そういったところを多くの方にこちらに来て知って頂けたらと思っています。

震災伝承と復興支援

次に伝承施設の概要を申し上げます。伝承施設と復興支援ということがどのように結びついているのかという点について、具体例を用いながら説明させて頂きたいと思います【図4】。

まず、先ほどお話しました岩手県の東日本大震災津波伝承館についてですが、こちらは道の駅、高田松原と併設しています。そして高田松原津波復興祈念公園内には式典広場があり、海を臨む場も併設されています。ここで献花などができます。岩手県東日本大震災津波伝承館「いわてＴＳＵＮＡＭＩメモリアル」の反対側には、併設する形で道の駅高田松原があります。【写真７】のこちらが全体像になります。広田湾に面した高田松原津波復興祈念公園の一部を共有しているのが、海の広場、式典広場になります。「いわてＴＳＵＮＡＭＩメモリアル」東日本大震災津波伝承館は、中央から向かって左側に位置しています。そして建物中央から向かって右側が道の駅高田松原になっています。そしてゾーン１、２、３までが、東日本大震災津波伝承館側に、ゾーン４は、道の駅高田松原側にあります。双方に行き交うことができます。設計についても簡単にご説明をしますと、海に向かう中央の道、これが「祈りの軸」となります。そして「祈りの軸」に交差するように復興の道、過去から未来への道、建物に沿って左から右が「復興の軸」となりまして繋がりがあります。祈りの軸と復興の軸の交差点には空間がありまして、上部の窓から光が入り、その下に水盤があるという施工です。施設全体が震災伝承施設でもあるし、また復興支援の施設、両方の機能を兼ね備えています。それが最大の特徴になります。

一方の福島県の東日本大震災・原子力災害伝承館には、すぐ隣接して双葉町産業交流センター（通称Ｆ－ＢＩＣＣエフ・ビック）があります【写真８】。こちらは現在双葉町のオフィスビルになっています。一階にフードコート、そしてお土産物コーナー、二階にはレストランが入っています。訪れた方の憩いの場にもなっています。また、双葉町産業交流センターは五階建てになっており、最上階には屋上もあります。そして東日本大震災・原子力災害伝承館の前には語り部広場というオープンスペースも備えています。

【写真 7】 いわて TSUNAMI メモリアル・道の駅高田松原

【写真 8】 語り部広場　双葉町産業交流センター（通称 F-BICC エフ・ビック）

伝統行事双葉ダルマ市の継承

福島の東日本大震災・原子力災害伝承館の横の語り部広場では、今年の一月九日の土曜日に双葉町伝統の「双葉ダルマ販売会」が開催されました。この「ダルマ市」は双葉町にとって非常に重要なものになっております。ダルマ市には特徴的な双葉ダルマがあります。太平洋ダルマと町章ダルマです【写真９・10】。こういった伝統的なダルマ市というのは震災後も年に一度、一月の上旬に仮設住宅などでも続いておりましたが、今回はコロナウィルスの影響で中止となってしまいました。ですがダルマというのは一年ごとに買い替えるものですので、町民の中にはダルマを買いたいという思いが非常に強かったそうです。そういったことから、ダルマの販売会だけを語り部広場で行おうではないかということで、今回実現したということです。そして双葉ダルマは東日本大震災と原発事故からの復興のシンボルとなっています。双葉町のホームページにも詳しく

【写真 9】　太平洋ダルマ

【写真 10】　町章ダルマ

【写真 11】 新春恒例双葉ダルマ販売会で相馬妙見院初發神社の宮司によるダルマ御霊入れ

載っていますので、ぜひご覧頂けたらと思います（https://www.town.fukushima-futaba.lg.jp/9024.htm）。そしてその双葉ダルマの継承は、元消防や町民の有志などが中心となり双葉町住民が避難している福島県いわき市の仮設住宅や復興災害住宅で継承されてきました。

これらのことから、伝統行事双葉ダルマと震災伝承施設が復興支援の役割を果しているのではないかということができると思われます。また、ＪＲ双葉町駅の前には、地元の方から妙見さまと慕われている相馬妙見院初發神社があります。巨大ダルマが毎年目玉になっている新春恒例の双葉ダルマ販売会当日には、同神社の宮司に御霊入れをして頂きました**【写真11】**。相馬妙見宮初發神社の社殿も、震災後は社殿の傾きと放射能の影響による避難指示のため、一時は朽ち果てそうになってしまいましたが、現在は再興しています**【写真12】**。そして、実際に双葉ダルマがこのように並べられ、販売されました**【写真13】**。一月九日に十年ぶりに開催された双葉ダルマ販売会は当館としても非常に重要な記念すべき催しものとなりましたので、ホーム

【写真 12】　相馬妙見院初發神社

【写真 13】　ダルマ販売会

ページにアップし、情報発信をさせて頂きました。恒例となっている「巨大ダルマ引き」は、ダルマを東西に三回引き、どちらが勝つか、一年の様子を占います。占いを読み上げさせて頂きますと、「東が勝てば家内安全・商売繁盛、西が勝てば無病息災・身体健康」の一年になるといわれており、今年の販売会に協力した町の消防団第二分団員の皆さんが綱を引き合いまして、二勝一敗で今年は西に軍配が上がり、無病息災・身体健康の吉の年になるということです。詳しくは当館のホームページのアーカイブとして掲載しておりますので、アクセスしてご覧頂ければと思います（https://www.fipo.or.jp/lore/archives/486）。

被災者（参加者）からの声

最後に、被災者（参加者）からの声についてお伝えします。震災当時、双葉町の双葉地方広域市町村圏組合消防本部に勤務していた大和田仁さんが、浪江町津島地区にて避難誘導を行なったときのことを証言し、当館展示の証言映像に出演されています。

大和田さんは楢葉町にお住まいですが、お祭り（双葉ダルマ販売会）に参加して下さり、私が案内させて頂きました。大和田さんいわく、「双葉町に来ると震災当時のことを思い出してしまうため、なかなか双葉町のほうに足が向きませんでしたが、ダルマ市をきっかけに、こちらに漸く来ることができました」とお話して下さいました。また、実際にご本人が出演する証言映像も見て頂き「双葉町に来てよかった。またこういった証言が伝承施設で伝わっていくこと、それが本当に大きな意味がありますよね」とお話を頂いたことが本当に嬉しかったです。以上で私の発表を終わらせて頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。